

## 長唄 新曲浦島

坪内逍遙が「新楽劇論」の提唱と共に、その実践の試みとして書いた作品です。明治39年に第一次文芸協会発会式に、その序曲が長唄として発表されたのですが、それが今では独立した曲として盛んに演奏されています。この曲は澄の江（丹後の国）の四季の海の情景が歌われており、おだやかに霞む静かな大海原や漁火、又荒浪が岩に砕けて散る勇壮さ、帰りを急ぐ船頭が歌う舟唄など、それらの変化が実に巧みに作曲に生かされています。

寄せ返る神代ながらの浪の音 塵の夜遠き調べかな

北を望めばびょうびょうと 水や空なる沖つ波 煙る碧の蒼茫と 霞むを見れば三つ五つ溶けて消えゆく片帆影 これがあらぬか帆影にあらぬ 沖の鷗のむらむらばつと立つ水煙 寄せては返る波がしら その八重潮のおちかたや げにも不老の神人のすむてふ三つの島根かも 夕日が浦に秋さびて磯辺に寄するとどろ波 岩に砕けて裂けて散る 水の行方の悠々と あしたに洗う高麗の岸 夕陽もそこに夜の殿 錦繡の帳暮れゆく中空に たが釣舟の玻璃の燈火白々と裾の紫色あせて 又染めかわる空模様 あれいつの間に一つ星 雲の真袖の綻びみせて 斑曇り変わるは秋の空の癖 しづ心なき風雲や 蟹の小舟のとりどりに 帰りを急ぐ櫓拍子に 雨よ降れ降れ風なら吹くな うちの親爺は舟乗りじゃ 風がものいや言伝しよもの 風は諸国を吹き廻る 舟唄かがる雁がねの 声も乱れて浦の戸に 岩波騒ぐ夕あらし すさまじかりける風情なり